最後に笑った男

「ロン！」

鋭く発声したのはオリていたかに見えた親の金子だった。

タンキのタンヤオ・チートイツ。ハイテイがついて九六〇〇点。これで形勢は一気に逆転した。ここをしのぎ切った金子が灘を捲くってトップ。トータルを一73・5ポイントとして結果待ちだ。

一方D卓でも南場に波乱が起こった。トップの飯田に一万八〇〇〇点以上の差をつけられて三着で最後の親を迎えた大隈が、

ドラ　を暗刻にした親満を飯田から直撃、一気に逆転したのだ。その後三局続けての流局でもひとりテンパイで得点を伸ばし、一フーロしたタンヤオ・ドラ一を二着目の安藤から直取りして、終わってみればこの半荘プラス60・9のトップ。片山に次ぐ予選二位で決勝進出を決めた。

予選三位の座は、冒頭で述べたように四回戦の大量得点で、伊藤が金子を押さえて獲得した。

読者代表の古谷祥啓は、一回戦こそ二着と健闘したものの、残りは三ラス。二年連続で読者代表が最下位に低迷してしまった。周囲が注目する中で著名な雀豪と対局するプレッシャーに加え、今年は最強戦をビデオ化するためのクルーが撮影を行っており、気の毒といえば気の毒だったが、結果的には格の違いを見せつけられた形となった。

片山まさゆき、大隈秀夫、伊藤優孝、そして小島武夫。

ついに役者は出揃った。

例年と異なり、決勝戦はビデオで完全収録するために、大掛かりなセッティングが行われた。卓の周囲は大型カメラが移動するためのレールで丸く取り囲まれ、さらにハンディーカメラを持ったスタッフがそれをフォローする。私のような観戦記者を含め、対局者・採譜者を除いた人間は立入禁止である。天井やサイドからの証明に照らされたその場所は、まさしく「土俵」そのものの真剣勝負の場と化していた。

決勝第一回戦は起家・片山。以下伊藤、大隈、小島の順となった。

東一局、まず先制したのは小島だ。

ドラ　のピンフで一四巡目テンパイ即リー。抵抗したのは片山である。小島の　をチーしてタンヤオ高め三色をテンパイ。しかしこれが裏目に出て小島に裏ドラとなる　を流してしまう。二〇〇〇・四〇〇〇。小島は昨年も東一局に井出のリーチを追い掛けて三九〇〇オールをツモあがってのスタートだっただけに、やはり今年も……と、改めて小島の強さが印象に残った。

東二局は片山が五二〇〇和了。伊藤とのリーチ合戦に勝ってのツモである。前回の決勝戦最下位の屈辱をはらそうという意気込みからか、積極的に撃って出る気迫がある。

その後は小場の流れになり、流局や小アガリが続き重苦しい膠着状態となった南二局、ドラの　と　のトイツを抱えた片山が喰い仕掛けて打った　が、大隈の

ポン　ポン

の五二〇〇に捕まる。大隈はこれで最初の満貫の貯金を守ってきた小島に肉薄し、南三局に親のリーチ・ツモでついに小島を逆転する。

ところが次局には小島がひとりテンパイで再度トップ浮上。見る者を息苦しくさせる展開でオーラスを迎えた。その結果は三人のイーシャンテンに対し大隈ひとりがクイタンのテンパイ。小島との一三〇〇点差を罰符で逆転して終了となった。

決勝第二回戦も起家は片山。小島、大隈、伊藤の順である。まず片山が一〇〇〇オール、一五〇〇と連荘。今度こそ流れに乗るかと思われた二本場に、伊藤の大物手が炸裂した。八巡目リーチの二巡後にツモった牌は　。

ハネ満である。片山は好配牌時にツモ牌がヨレるなど、どうしても波に乗り切れない。いまは耐えるしかないと判断したのか、しばらく彼は身を低くしていた。

東二局、親の小島が連荘して徐々に伊藤との差を詰めた矢先、伊藤のタンヤオ・トイトイが小島を直撃する　のうち、あえて高め三色の可能性を断つ　を切っての放銃。完全に伊藤のペース。

さらに伊藤は、大隈の親をリーチのみで蹴って迎えた東ラスの親番で三巡目にリーチをかける。その牌姿はなんとこうだった。

この親に敢然と立ち向かったのは、やはりミスター麻雀・小島武夫である。　と強打したあと　を叩き切って、

「エイッ、どうだッ！」

「まいった！」

一瞬、場内を沸かせたあと、一五巡目に追い掛けリーチ。一発で衆人のどよめきとともにペン　を引きあがった。

ドラは　。一発ツモでしか成立しないハネ満で、一気に逆転トップに立った。

『やはり、この祭りは小島武夫のものなのだ』と思ったギャラリーは少なくなかったはずだ。

南一局には、これまで耐えに耐えてきた片山が、小さなアガリと二回のテンパイ・流局で三本場まで積むが、どうしても流れを引き寄せることができない。小島に親を蹴られたときには、点数的にはまだ十分に挽回可能な範囲にいたにもかかわらず片山の雪辱戦はここまでという流れは明らかだった。

ラス前には大隈が粘りの連荘でラス目から二位の伊藤に二六〇〇点差まで肉薄し、優勝の行方は混沌としてきた。大隈トップなら文句なしだが、小島が勝つには四八〇〇点大隈を上回る点差でトップをとらなくてはならないのだ。しぶとく食い下がる守りの神様・大隈、流れをつかんだ帝王・小島。だれもが二人の争いに注目していた。

南三局の三本場、小島が「小島武夫の麻雀」を打った。

とポンした小島の手牌は　だった。ドラは　。ここに　をツモった小島は打　。この局面で、小島は高め満貫の手を、アガリにくいハネ満手に変えたのだ。さらに次巡　をカン。皮肉にもリンシャンからのツモは　。当然のようにツモ切った小島は、流局すると、

「アタタタタァ！」

と卓につっ伏し、ギャラリーを沸かせた。授賞式のスピーチでこのことに触れた小島はこう言い切った。

「何度やっても、私はあの場面、トイトイに受けているでしょう。それが私の打ち方なんです」

もちろんギャラリーは拍手でこれに応えた。

オーラス、ギャラリーは固唾を呑んで小島の摸打を見つめていた。

この配牌が、一〇巡目には三フーロしてこう変わっていた。

チー　チー

小島が　をツモってタイトル防衛。流れがそう物語っているようだった。そして一五巡目、小島は　を無造作にツモ切った。

「ロン！」

対面の伊藤から緊張した声が上がり、一瞬遅れて彼の後方から唸り声のようなものが起こった。

ドラ　入りの親ッパネ。絵に描いたような大逆転劇だった。

次の局、片山のひとりテンパイですべての局が終了しても、人々は伊藤の強烈な一発の余韻をぬぐい去れないでいた。

崖っぷちの予選四回戦で爆発し、決勝ではこれしかないという一点をついた和了。「死神」というあまりエレガントではないニックネームの由来を思い知らされた気がした。

夫人の浦田和子プロをはじめ、多くの友人たちに励まされ、照れる最強の男・伊藤優孝は文字通り最後に、最後の最後に笑った男だったのだ。

（文中敬称略）